

## 発達としての共食

社会的な食のはじまり

◎ 外山紀子著

霊長類は繁殖や生存のために共食を行うが、人間の共食は生物学的な必要性から離れて他者との関係性に重点をおくということが基本にあり、これは他の霊長類との違いになっている。

哺乳類では赤ん坊は吸っては休むという独特のリズムがあり、それが授乳者とのやりとりのきっかけになっていて、ここからは、赤ん坊には食物摂取を他者とのやりとりの場とすることへの強い嗜好性があることがわかる。幼稚園や保育園の食事場面では、子どもたちは誰が横に座るかに関心をもち、体を触れ合わせては言葉をつかったやりとりを成立させている。これらを見て、子どもの食事場面を長年観察してきた著者は、子どもの行動には共食を他者とのやりとりの場として成立させる機能が隠れており、これは生得的なものだという。ところが今、子どもはこの機能を放棄して孤食に向かっているといい、ここには大人の責任が大きいと著者は強い警告を発している。(B6判・165頁・2200円・新曜社)

出版 2017 4月号